

清泉大学

清泉大学・短期大学部

数理・データサイエンス・AI 教育プログラム

令和 7(2025)年度自己点検・評価報告書

令和 8(2026)年 3 月  
清泉大学・清泉大学短期大学部  
情報システム委員会 MDASH 教育部会

## 【趣旨】

本報告書は、清泉大学・清泉大学短期大学の自己点検・評価規程に則り、情報システム委員会(MDASH 教育部会)が主体となり、数理・データサイエンス・AI 教育プログラムの自己点検・評価を実施する。

## 【目的】

本学の建学の精神に基づき、数理・データサイエンス・AI 教育の充実・改善と活性化を推進し、Society 5.0 に対応できる人材育成を図る。

## 【組織】

自己点検評価委員会が毎年行う各部署の自己点検・評価の一環として、情報システム委員会(MDASH 教育部会)が中心となって評価する。また、その評価結果については教務委員会・自己点検評価委員会で確認し、機関レベル、教育課程レベル、授業レベルでの改善を促すものとする。

## 【生成 AI 活用ガイドラインの施行と適正利用の推進】

本学では、2025 年度秋学期より「生成 AI 活用ガイドライン(教員用・学生用)」を施行し、同ガイドラインに基づいた教育活動を展開している。本ガイドラインにおいては、各授業における生成 AI の取り扱い方針を「①使用禁止」「②条件付き許可」「③積極的活用」の 3 区分で明確化している。全教員に対し、担当科目のシラバスへ当該方針を明記すること、および初回授業(オリエンテーション)時に学生へ周知徹底することを求めており、全学的な生成 AI の適正利用とリテラシー向上を推進している。

## 【2025 年度の点検・評価の対象】

### ①清泉 AI リテラシー講座

大学においては、2025 年度秋学期に開講した全学必修科目「情報リテラシー II」の学生による授業評価を主な分析対象とする。また、短期大学部においては、2025 年度春学期及び秋学期に開講した選択科目「データサイエンスと AI」の学生による授業評価を主な分析対象とする。

### ②清泉 AI 応用基礎講座

大学においては、2025 年度春学期に開講した選択科目「コンピュータサイエンス I」「データサイエンスと AI」、秋学期に開講した選択科目「AI 活用とデータエンジニアリング I」の学生による授業評価を主な分析対象とする。

## 【評価結果の判定】

各点検項目の結果に対し、以下、4段階評価で自己点検を行った。

【4】十分に達成できている

【3】概ね達成できている

【2】やや達成が不十分である

【1】ほとんど達成できていない

## ①清泉 AIリテラシー講座について

本学は、2022年度 AIリテラシー教育の実績を元に大学・短期大学部とも文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)」に対し、2023年5月に認定申請を行った。その結果、2023年8月に正式認定プログラムとして承認された。認定後は、以下の「MDASH」ロゴが使用可能となり、本学HPにも掲載されている。その当時、長野県下では、文系大学・短期大学部とも認定を受けたのは本学のみであり、その先進的取組による教育成果は大きいといえる。また、認定に伴い、本学専用のデジタルバッジを作成した。このデジタルバッジは、AIリテラシー教育の受講証明となり、学生が好きな時にステークホルダーに提示することが可能である。

その後、文部科学省による「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度(リテラシーレベル)」のカリキュラム改訂が2024年2月に行われた。改訂の理由は、生成AIの台頭であった。それに伴い、本学のAIリテラシー教育も改訂することを余儀なくされた。認定当初は、放送大学のAI講座を活用したオンデマンド教材(科目名:データサイエンスとAI)を利用していたが、2025年度からは全学必修科目の1年次共通教育科目「情報リテラシーⅡ」のなかで実施することとした。新たなカリキュラムでは、2024年2月の文科省改訂に完全準拠したテキストを採用している。適切な動画教材等を用いたオンデマンドによる知識修得に加え、対面授業によるハイブリッド型の授業展開へと変更した。具体的には、主として表計算ソフトを用いてデータの集計・分析・可視化を行う実践的な演習を取り入れ、期末には、長野市や須坂市の実際の人口統計データを活用した分析課題も行うなど、より実践的で充実した内容へと改訂を行った。



**MDASH**  
Literacy  
Approved Program for Mathematics,  
Data science and AI Smart Higher Education,  
designated by the Gov of Japan

数理・データサイエンス・AI  
教育プログラム認定制度  
リテラシーレベル



## <大学>

### 【自己点検・評価結果】

#### 学内からの視点(清泉 AI リテラシー講座)

点検項目	結果	自己評価																								
プログラムの履修・修得状況	科目担当教員及び MDASH 教育部会において、授業終了後の履修者の知識・スキルの到達状況を分析し、「DX による学修者本位の学修の実現に向けた報告書」として取りまとめた。その結果、2025 年度の全履修者のうち、約 40%が次段階である「応用基礎レベル」の学修に対応可能な水準に達していることが明らかとなった。	【評価 4】 本プログラムを全学必修科目として開講したことで、すべての新入生の AI に関する知識・スキルを網羅的に把握することが可能となった。これにより、より高度な教育段階へと接続するための客観的な指標を提示できるようになったことは、特筆すべき成果であるといえる。																								
教育効果としての学修成果	該当科目「情報リテラシーⅡ」の授業評価アンケート結果(5 段階評価)は、以下の通りである。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>クラス名</th> <th>Q5 到達目標</th> <th>Q15 満足度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>心理・文芸 a</td> <td>4.70</td> <td>4.60(41)</td> </tr> <tr> <td>心理・文芸 b</td> <td>4.63</td> <td>4.49(40)</td> </tr> <tr> <td>心理・文芸 c</td> <td>4.55</td> <td>4.58(39)</td> </tr> <tr> <td>心理・文芸 e</td> <td>4.94</td> <td>4.83(18)</td> </tr> <tr> <td>情報 d</td> <td>4.64</td> <td>4.68(30)</td> </tr> <tr> <td>看護 a</td> <td>4.84</td> <td>4.77(35)</td> </tr> <tr> <td>看護 b</td> <td>4.89</td> <td>4.63(36)</td> </tr> </tbody> </table> ※(履修数)	クラス名	Q5 到達目標	Q15 満足度	心理・文芸 a	4.70	4.60(41)	心理・文芸 b	4.63	4.49(40)	心理・文芸 c	4.55	4.58(39)	心理・文芸 e	4.94	4.83(18)	情報 d	4.64	4.68(30)	看護 a	4.84	4.77(35)	看護 b	4.89	4.63(36)	【評価 4】 履修者は、目的とする学修成果を習得したと考えられる。
クラス名	Q5 到達目標	Q15 満足度																								
心理・文芸 a	4.70	4.60(41)																								
心理・文芸 b	4.63	4.49(40)																								
心理・文芸 c	4.55	4.58(39)																								
心理・文芸 e	4.94	4.83(18)																								
情報 d	4.64	4.68(30)																								
看護 a	4.84	4.77(35)																								
看護 b	4.89	4.63(36)																								
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	該当科目「情報リテラシーⅡ」の授業評価アンケート結果(5 段階評価)は、以下の通りである。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>クラス名</th> <th>Q8 理解度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>心理・文化芸術 a</td> <td>4.78(41)</td> </tr> <tr> <td>心理・文化芸術 b</td> <td>4.71(40)</td> </tr> <tr> <td>心理・文化芸術 c</td> <td>4.81(39)</td> </tr> <tr> <td>心理・文化芸術 e</td> <td>4.72(18)</td> </tr> <tr> <td>情報 d</td> <td>4.79(30)</td> </tr> <tr> <td>看護 a</td> <td>4.81(35)</td> </tr> <tr> <td>看護 b</td> <td>4.81(36)</td> </tr> </tbody> </table> ※(履修数)	クラス名	Q8 理解度	心理・文化芸術 a	4.78(41)	心理・文化芸術 b	4.71(40)	心理・文化芸術 c	4.81(39)	心理・文化芸術 e	4.72(18)	情報 d	4.79(30)	看護 a	4.81(35)	看護 b	4.81(36)	【評価 4】 履修者は、授業内容を「理解した」と考えられる。								
クラス名	Q8 理解度																									
心理・文化芸術 a	4.78(41)																									
心理・文化芸術 b	4.71(40)																									
心理・文化芸術 c	4.81(39)																									
心理・文化芸術 e	4.72(18)																									
情報 d	4.79(30)																									
看護 a	4.81(35)																									
看護 b	4.81(36)																									
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	履修者に対する授業評価アンケートの自由記述において、他学生への推奨コメントについて確認している。また、本教育プログラムは、大学パンフレットへの掲載や専用ホームページを設けて推奨している。	【評価 4】 2025 年度より、全学必修となっているため、本プログラムの周知は十分である。																								

点検項目	結果	自己評価
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	2025年度より、全学必修となっているため、履修率は100%である。	【評価4】 2025年度より、全学必修となっている。
教育プログラムの管理運営の責任者として専任教員の配置	本教育プログラムの管理は、情報システム委員会(MDASH 教育部会)が行っている。また、該当科目「情報リテラシーⅡ」については、非常勤講師2名が担当し、専任教員(運営責任者)との密接な連携により、授業を展開している。	【評価4】 教育プログラムの管理体制を構築し、専任教員を運営責任者として配置している。
評価結果を学内および社会に広く公開している	本学 HP に掲載している。内容については今後充実を図る。	【評価4】 本報告書を HP に公開している。

## <短期大学部>

### 【自己点検・評価結果】

#### 学内からの視点(清泉 AI リテラシー講座)

2025年度は、短期大学部「国際コミュニケーション科」の新入生募集停止に伴い、本プログラム認定後初めて、短期大学部からの履修希望者が0名となる結果を招いた。短期大学部には「こども学科」が設置されているものの、これまで本プログラムの履修者の大半を「国際コミュニケーション科」の学生が占めていたという、履修層の偏りが主な要因として挙げられる。

この課題を重く受け止め、2026年度以降は「こども学科」の学生にとっても、自身の将来のキャリア(保育・幼児教育分野等)に活かせる有意義な学びとして捉えられるよう、科目の実施方法の再検討や履修勧奨アプローチの改善など、履修促進策の抜本的な見直しを図っていく。

## ②清泉 AI 応用基礎講座について


本学は、2025 年度より文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度（応用基礎レベル）」の改訂版カリキュラム（2024 年 2 月改訂）に準拠した教育プログラムを導入した。本プログラムは、「コンピュータサイエンス I」を必修科目とし、「データサイエンスと AI」または「AI 活用とデータエンジニアリング I」のいずれか 1 科目を選択必修科目として設定している。これら合計 2 科目 4 単位を修得した学生を、本プログラムの修了者として認定する。また、「プログラミング I」を選択科目としている。

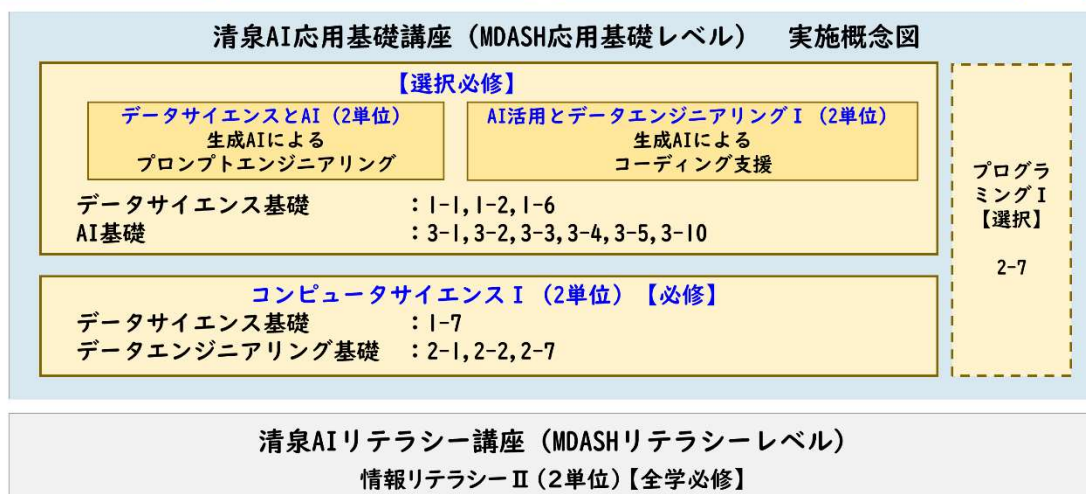
また、修了者に対しては本学専用のデジタルバッジを発行する体制を整えた。このデジタルバッジは AI 応用基礎教育の修了証明として機能し、学生が就職活動等において、企業などのステークホルダーへ自身のスキルを客観的かつ容易に提示することが可能となっている。

なお、本プログラムについては、これら一連の実績をもとに、2026 年度に文部科学省へ正式な認定プログラムとして申請する予定である。



## 清泉大学 数理・データサイエンス・AI 教育プログラム 応用基礎レベル 取組概要

<b>プログラム概要</b> 本学の清泉AI応用基礎講座（MDASH応用基礎）は、MDASHリテラシーの教育を補完的・発展的に学び、データから意味を抽出し、現場にフィードバックする能力、AIを活用し課題解決につなげる基礎能力を修得し、自らの専門分野にその知識やスキルを応用するための大局的な視点を獲得することを目的とする。学生の習熟レベルに対応した2系統の修了プログラムを実施している。	<b>プログラムの修了要件</b> 大学共通教育科目として開講している、以下の科目群を修得すること ①「コンピュータサイエンス I」（2単位）【必修】 ②「データサイエンスとAI」（2単位）【選択必修】 ③「AI活用とデータエンジニアリング I」（2単位）【選択必修】 ④「プログラミング I」（2単位）【選択】 ①と②③のどちらか1科目を選択必修とする。合計4単位を修得することを、プログラムの修了要件とする。④は選択とする。		
<b>教育プログラム名</b> 清泉AI応用基礎講座	<b>対象学生</b> 全学部全学科の学生（選択科目）	<b>プログラムの改善や自己点検・評価を行う組織</b> 情報システム委員会 MDASH教育部会	



## <大学>

### 【自己点検・評価結果】

#### 学内からの視点(清泉 AI 応用基礎講座)

点検項目	結果	自己評価
プログラムの履修・修得状況	本プログラムは 2025 年度より運用を開始した。初年度となる 2025 年度のプログラム修了者は、人間学部から 1 名、人文社会科学部から 15 名の計 16 名にとどまった。この主な要因として、全学部生が共通して履修できる時間帯での科目配置(開講枠)が限定的であり、他科目との兼ね合いから学生の履修機会を十分に確保できなかったことが挙げられる。	【評価 2】 初年度の修了者数が伸び悩んだという課題を受け、2026 年度以降は、より多くの学生が柔軟に本プログラムを履修できるよう時間割配置の抜本的な見直しを行う。他学部・他学科の必修科目との重複を避けるなど、全学的な履修環境の整備を早急に進め、プログラム履修者および修了者の着実な増加を図っていく。
教育効果としての学修成果	授業評価アンケート結果(5 段階評価)は、以下の通りである。 ・科目名の略称 CPSC:コンピュータサイエンス I DSAI: データサイエンスと AI AIDE: AI 活用とデータエンジニアリング I  科目名    Q5 到達目標    Q15 満足度 CPSC            4.90            4.95 (21) DSAI            4.79            4.82 (34) AIDE            4.88            4.88 (20) ※(履修数)	【評価 4】 アンケート結果が示す通り、すべての対象科目において「到達目標の達成度(Q5)」および「満足度(Q15)」が、高い水準を記録している。この結果から、受講生の多くが授業を通じて本プログラムの意義や内容に満足し、目的とする学修成果を十分に修得したと評価できる。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	該当科目「情報リテラシー II」の授業評価アンケート結果(5 段階評価)は、以下の通りである。 ・科目名の略称 CPSC:コンピュータサイエンス I DSAI: データサイエンスと AI AIDE: AI 活用とデータエンジニアリング I  科目名    Q8 理解度 CPSC            4.85 (21) DSAI            4.79 (34) AIDE            4.69 (20) ※(履修数)	【評価 4】 アンケート結果が示す通り、すべての対象科目において「理解度(Q8)」が、高い水準を記録している。この結果から、受講生の多くが授業を通じて本プログラムの内容を十分に理解したと評価できる。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	本プログラムの履修者を対象とした授業評価アンケートを実施し、自由記述欄等において本プログラムに対する満足度や、他学生・後輩への推奨の意向を確認している。その結果、実践的なデータ分析スキルの習得や最新の AI 動向を学べたことに対する	【評価 2】 アンケートにおいて履修者から得られた肯定的評価を、次年度以降の履修促進に有効活用できていない点が課題である。そのため 2026 年度より、新入生オリエンテーション等

点検項目	結果	自己評価
	肯定的な意見などが見受けられた。	の場において、既履修者(プログラム修了者)から後輩へ直接受講を推奨する機会を設けるなど、学生の生の声を通じた本プログラムの周知および履修意欲の喚起を図っていく。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	「DX による学修者本位の学修の実現に向けた報告書」における学修状況の分析により、2025 年度の全履修者のうち約 40%が、次段階である「応用基礎レベル」の学修に十分対応可能な水準に到達していることが確認された。この進捗と成果を踏まえ、さらなる履修率の向上および上位プログラムへの接続を図るため、該当するポテンシャルの高い学生に対しては、アドバイザー面談等を通じて個別のアプローチを行い、本プログラムの履修を積極的に推奨していく計画である。	<b>【評価 2】</b> 学修データの分析によって明らかとなった「応用基礎レベルに対応可能な層(約 40%)」に対し、より効果的な履修勧奨を行うことが次年度の課題である。2026 年度より、アドバイザー教員との面談等の機会を最大限に活用し、到達度データに基づいた本プログラムの周知や履修のメリットを個別に伝える仕組みを構築することで、履修者の着実な増加を図っていく。
教育プログラムの管理運営の責任者として専任教員の配置	本教育プログラムの管理は、情報システム委員会(MDASH 教育部会)が行っている。また、該当科目については、専任講師 2 名が担当し、MDASH 教育部会長がプログラムの管理運営を行っている。	<b>【評価 4】</b> 教育プログラムの管理体制を構築し、専任教員を運営責任者として配置している。
評価結果を学内および社会に広く公開している	本学 HP に掲載している。内容については今後充実を図る。	<b>【評価 4】</b> 本報告書を HP に公開している。

## <大学・短期大学部(共通)>

### 学外からの視点(清泉 AI リテラシー講座、清泉 AI 応用基礎講座)

点検項目	結果	自己評価
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	<p><b>【清泉 AI リテラシー講座】</b> 2025 年度より、全学必修化して運用を開始した。よって、現時点において本プログラム修了者は、まだ評価に値するだけの十分な数の卒業生を輩出していない。そのため、修了者の進路や実社会での活躍状況、ならびに就職先企業等からの客観的評価に関する実績を記載するには時期尚早である。</p> <p><b>【清泉 AI 応用基礎講座】</b> 2025 年度より、運用を開始したため、現時点において本プログラム修了者は、まだ卒業に至っていない。そのため、修了者の進路や実社会での活躍状況、ならびに就職先企業等からの客観的評価に関する実績を記載するには時期尚早である。</p> <p><b>【本プログラム修了者が社会へ出る時のために】</b> 今後は、修了生が社会へと輩出される時期を見据え、キャリア支援担当部署(就職課等)と連携し、卒業生の進路状況の把握や就職先企業に対するアンケート調査、ならびに企業の人事・現場担当者へのインタビュー調査を実施する計画である。</p>	<p><b>【評価 2】</b> 修了生の社会における活躍状況や企業からの評価を客観的に把握することは、本プログラムの実践的価値を検証する上で重要であると認識している。今後は、卒業生に対する追跡調査や企業へのヒアリングを定期的かつ体系的に実施する体制を構築する。また、そこで得られた社会のリアルなニーズや評価を MDASH 教育部会等で分析し、次年度以降のプログラム内容やシラバスの継続的な改善へと確実に還元する。</p>
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	<p>本学が毎年開催する「外部評価委員会」において、産業界を代表する企業有識者等に対し、本教育プログラムのカリキュラム内容およびデータ演習等の教育手法について意見聴取を行っている。生成 AI が急速に社会実装される昨今の状況を踏まえ、学外委員からは、単なる技術習得にとどまらない本質的な人材育成を求める以下のような意見が寄せられた。</p> <p>①生成 AI の利用のあり方を含めた教育方針が示されることが望まれます。また、学校としてこれからさらに議論を深め、生成 AI の活用方針が定まってくることを期待される。</p> <p>②AI 分野は人間の尊厳に影響を与える可能性がある分野であるため、カトリック大学としての価値観の共有が明確化されることを期待する。</p> <p>③長野市のオープンデータを活用した教育プログラムについて、必要な改善を加えながら進めていただければと思う。</p> <p>④学生が AI に依存しすぎず、有効的な活用方法を身に付けてほしい。</p>	<p><b>【評価 3】</b> 産業界からの意見は、生成 AI 時代において「人間中心の AI 利活用」がいかに重要であるかを浮き彫りにしている。本学では、この指摘を重く受け止め、今後のプログラム展開においては、単なるデータ処理技術の修得にとどまらず、「データや AI を利活用する際の倫理的・法的・社会的な留意点」の教育をより一層強化する。AI をツールとして主体的に操り、人間ならではの論理的思考力や創造性を発揮できる「デジタル人材」の育成に向け、実践的なデータ演習と並行して、倫理観・人間性を涵養する教育内容へと継続的な</p>

点検項目	結果	自己評価
	⑤社会のニーズに応えるため、AI を安全かつ効果的に活用するために必要な知識、スキル、倫理観を学ぶことは非常に大切である。	ブラッシュアップを図る。
<p>数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること</p>	<p><b>【学ぶ楽しさの喚起】</b>  科目内容においては、初学段階から興味を持って取り組めるよう、身近な AI 活用事例をはじめ、生成 AI によって作成された動画や音楽の事例など、視覚的・聴覚的に惹きつける適切な動画教材等を取り入れている。これらを実際に視聴・体験させることで、最新技術に対する驚きや好奇心を喚起し、「学ぶ楽しさ」を実感できる構成としている。</p> <p><b>【学ぶことの意義の理解】</b>  データサイエンスや生成 AI を学ぶ意義については、AI による社会変化や最新動向を交えて解説している。現代の AI 技術が「一部の専門家による開発段階」から「一般の人々が日常の業務で活用する段階」へと発展し、あらゆるビジネスシーンで積極活用されている現状を提示する。これにより、本プログラムを通じてデータを適切に扱うリテラシーを身につければ、卒業後に社会が求める「AI・データ活用人材」として十分に活躍できるという実践的なキャリアビジョンを描かせ、自発的に学ぶことの意義を理解させている。</p>	<p><b>【評価3】</b>  産業界からの意見や、急速に進化を続けるAI技術の最新動向を常に注視し、引き続き学生の知的好奇心を刺激するような新しい事例や教材の発掘に努める。探索した教材をシラバスや授業展開へ継続的かつ柔軟に取り入れることで、学生が「学ぶ楽しさ」と「学ぶ意義」をより一層実感し、主体的な学修へと向かう教育プログラムへとブラッシュアップを図る。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p>	<p>情報システム委員会および MDASH 教育部会において、本プログラムの教育内容・水準の維持および継続的な向上を図るため、最新の AI 技術動向や効果的な教育手法に関する情報収集・共有を定期的実施している。さらに、毎学期実施する学生の授業評価アンケート結果や、外部評価委員会等で得られた企業有識者からの知見を多角的に分析し、学生にとって真に「分かりやすい」かつ「興味・関心を惹く」授業となるよう、実際のデータを用いた演習の導入やハイブリッド型授業の活用など、講義内容および実施方法の継続的な改善に取り組んでいる。</p>	<p><b>【評価3】</b>  本プログラムの質を担保し、最新の社会要請に応えるための情報収集・共有体制が学内委員会を通じて構築され、適正に運用されていると評価できる。今後は、収集した情報や学内外からのフィードバックを、次年度のシラバス改訂や教材のブラッシュアップへより迅速かつ具体的に反映させる仕組みを強化し、学生のさらなる理解度向上と教育プログラムの充実を図る。</p>

# DXによる学修者本位の学修の実現に向けた報告書

～ DXによる教育の質的転換支援 ～

2026年3月  
情報システム委員会  
MDASH 教育部会

## 1. 取組の名称

全学必修「情報リテラシー教育」を起点としたデータ駆動型学修支援モデルの構築  
～LMS データに基づく MDASH（数理・データサイエンス・AI）リテラシーから応用基礎レベルへの接続強化～

## 2. 取組の背景と課題

現状：本学では全学部生に対し、MDASH リテラシーレベルに準拠した「情報リテラシー2」を必修化している。

課題：しかし、多くの学生にとって同科目が「表計算ソフト基本操作及び基礎統計関数の習得」に留まっており、次のステップである「MDASH 応用基礎レベル」への履修の動機づけにつなげていない。

原因：学生自身が自分の数理 AI 関連の適性に気づけていないこと、及び、多くの教員が学生個々のスキル状況を把握できず、適切な履修指導ができていないことにある。

## 3. 取組の目的

LMS (Google Classroom) に蓄積された「情報リテラシー2」の学習データを詳細に分析・可視化することで、学生一人ひとりの数理 AI 関連の適性を診断する。その結果に基づき、個別最適な履修指導を行い、全学的な「MDASH 応用基礎レベル科目」の履修率および修得率を向上させることを目的とする。

## 4. 具体的な取組内容 (3つのステップ)

### Step 1：データの収集・診断

- ・全学生が履修する「情報リテラシー2」において、LMS 上で分析に必要なデータを収集する。
- ・情報リテラシー2：表計算分析スキル（期末テスト）、AI リテラシースコア（活用事例・AI 倫理）

### Step 2：分析・可視化

- ・収集データを統合し、散布図から、学生個々のレベルを可視化する(図1)。
- ・学生向け：自身の現在位置を示す MDASH アセスメント結果（数理 AI 関連の適性診断）を確認
- ・教員向け：学生個々のレベルと学部・学科ごとの習熟度分布（適性分布）を提示。

### Step 3：接続・活用

- ・MDASH アセスメント結果に基づき、表1に示すようなメッセージを全学生にメール送信する（メール配信機能）
- ・学生がメッセージを受け取った後、教員用レポートによる履修指導（アドバイザー面談）

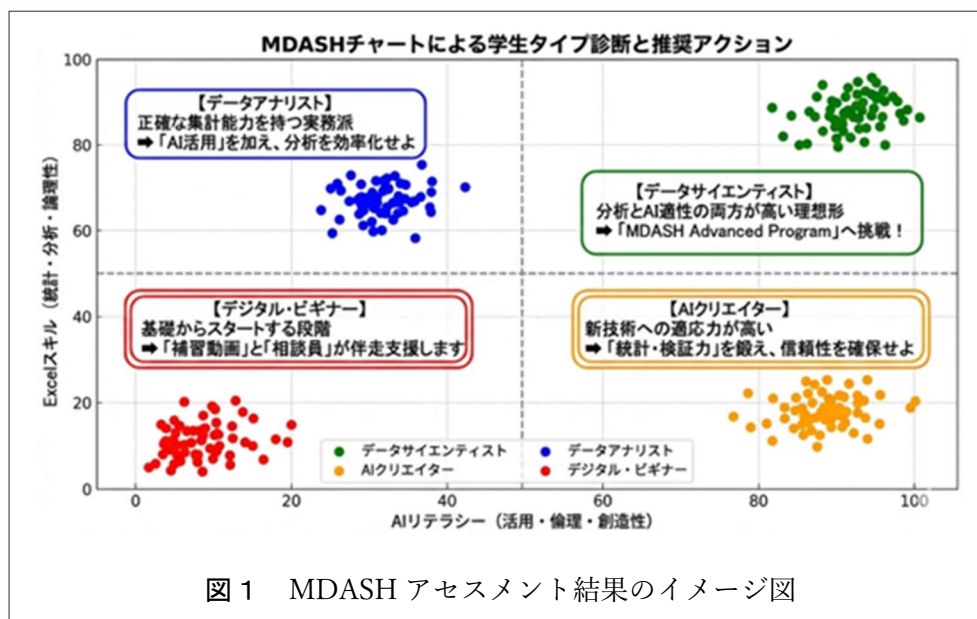


図1 MDASH アセスメント結果のイメージ図

表1 MDASH アセスメント結果からの学生へのメッセージ送信例

MDASH チャート内名称	診断結果	推奨アクション	推奨科目や支援例
【教員向け】 MDASH 教育適性あり  【学生向け】 データサイエンティスト	MDASH チャートの結果、あなたはデータ分析の素養とAI活用の適性の両方で高いスコアを記録しました。本学が育成を目指す理想的な MDASH 人材の資質を備えています。	次年度は、MDASH 応用基礎レベル以下の科目を履修し、清泉 MDASH 応用基礎講座の修了を目指し、「データサイエンス・AI実務パスポート」の資格取得を推奨します。	コンピュータサイエンス I データサイエンスと AI AI活用とデータエンジニアリング I プログラミング I
【教員向け】 表計算スキル (高)  【学生向け】 データアナリスト	MDASH チャートの結果、あなたは補表計算ソフトを用いた正確なデータ集計・分析能力に優れています。一方で、生成 AI などの最新技術の活用には、成長余力があります。	あなたの強みである分析の正確さに AI による効率化を加えることで、より高度な分析が可能になります。データ処理を深めつつ、初歩的な AI 活用法を学ぶ科目の履修を推奨します。	コンピュータサイエンス I データサイエンスと AI プログラミング I
【教員向け】 AI リテラシー (高)  【学生向け】 AI クリエイター	MDASH チャートの結果、あなたは新しい生成 AI への関心の高さや AI ツールを使いこなす適応力に優れています。しかし、AI が出した答えが正しいか検証するためのスキルに課題が見られます。	AI の回答を鵜呑みにせず、データに基づいて判断できる人材になるために、批判的思考を学ぶことやデータドリブンの重要性を学ぶことを推奨します。	データサイエンスと AI データ処理論 クリティカル・シンキング ウェブデザイン
【教員・学生向け】 デジタル・ビギナー	MDASH チャートの結果、デジタルツールの操作や活用に少し苦手意識があるようです。しかし、今は焦る必要はありません。基礎を固めることで、必ず知識やスキルを伸ばすことができます。	情報フォローアップ演習等を受講し、基礎的操作に自信をつけましょう。また、積極的にアドバイザー教員やシステム室、学生相談員からの支援を受けましょう。	情報フォローアップ演習 タッチタイピング練習 アドバイザー教員との面接 学生相談員による支援

## 5. 達成目標 (KPI)

### ① アウトプット指標：

- ・データ可視化：全1年生に対してMDASHアセスメントの通称と現在位置を把握
- ・学生への通知：個別最適化学習リコメンド（推奨科目等）の配信
- ・教員用アセスメントレポートの提供（履修指導に活用）
- ・教材整備：習熟度不足の学生（デジタル・ビギナー）を支援するための補習教材等の整備

### ② アウトカム指標（成果）

- ・応用基礎レベル科目の履修率向上:令和7年度は、全学部から履修者がいることが目標。
- ・応用基礎科目の単位修得率:履修学生を追跡し、適性に基づいたマッチングの有効性を検証する。
- ・授業評価アンケートにおいて、「満足度」及び「理解度」の向上。
- ・結果を受けて、適宜、カリキュラムやシラバス改善の検討を行う。

## 6. 全学的な実施体制

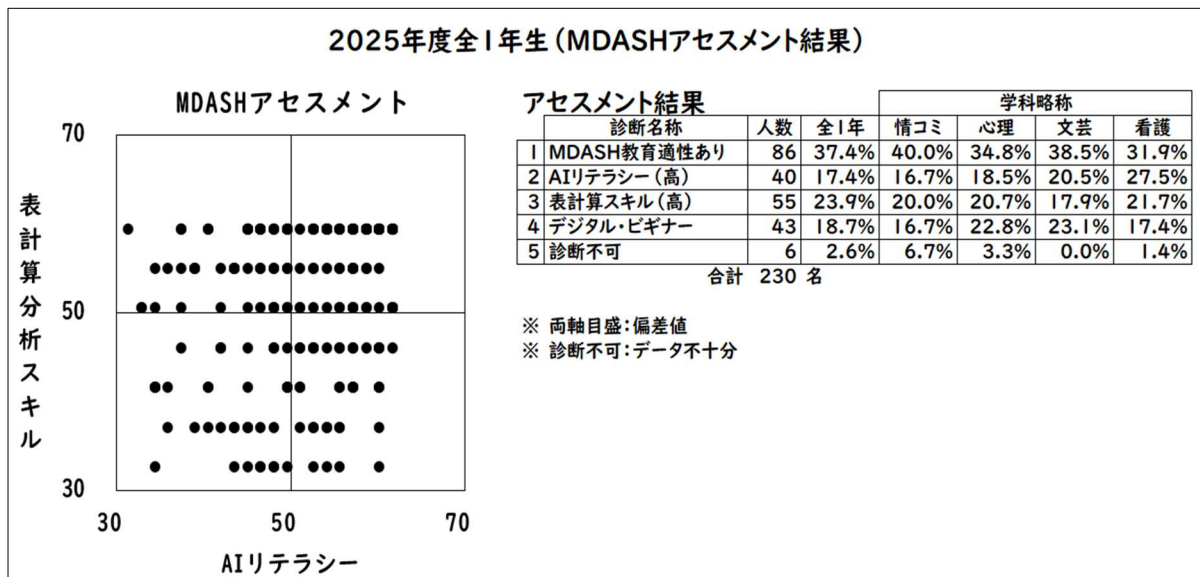
統括：学長・副学長を含む「教学マネジメント会議」が実施計画を推進・検証。

教学：情報システム委員会・MDASH教育部会が、スキーム定義とカリキュラム設計。

評価：外部有識者による評価委員会を設置し、年に1回進捗を評価する。

## 7. MDASH アセスメント結果

- ①2025年度の本学1年生全体では、「デジタル・ビギナー」に該当する学生が、約20%弱の割合で存在した。この学生達は、デジタルスキルやAIリテラシーが不足しており、個々人の習熟度に合わせたデジタル教育支援の必要性が明らかとなった。
- ②一方、さらなるMDASH教育（応用基礎レベル）に適性がある学生は、約40%弱存在しており、本人への適性診断結果の通知やアドバイザー教員による履修指導により、高度なMDASH教育へ導ける可能性も示唆された。



以上